

2024年1月13日(土)夜 『神聖で繋がり合う日』 メール前文

名実ともに神聖復活した心境で在り続けるに至る直前の段階で、私達が避けて通れない課題があります。それは、感情想念に把われず、個でありつつも全体を認識しながら生きる練習をすることです。

すでにその段階を通り抜けられた方もおられますし、今まさにその渦中の方もおられます。また、これからその段階を通る方もおられるかと思いますが、感情の手綱をしっかりと握り、自由に制御できる境涯に立つためには、神聖そのものとして生きる覚悟を持ち、想念と言動行為に行ない顕わすことが必須であります。

それは、出来たつもりでいることでもなければ、フタをして見ないようにすることでもありません。不動心であることです。本当に神聖の視座に立つと人は、何を見ても聞いても、何と触れ合ったとしても、本当に心が乱れないでいられます。そのときの意識には、愛以外の不純物が一切見当たらないのが特徴です。

それは知識としてはおなじみの、“何ものにも犯されない心境”です。見たり聞いたりしたもの、味わい嗅ぎ触れたものに、昔からの癖でいちいち感覚的に、「これは正しい、正しくない」「あれは好き、嫌い」とジャッジメントを下していたのでは、いつまで経っても神聖の境涯が私達のものにはなることはありません。

こういった感情想念にかかわる話に触れると、にわかに心が曇り空になる場合がありますが、それは自身（自心）の中に沈殿していた把われの想いが反応して浮かび上がり、消えてゆこうとしているからです。（そのとき守護霊は私達の内部で、その機会を通じて思い込みを手放させようと働かれています）

その段階を卒業している場合は、このような話に触れても心が乱れません。「なぜ」「どうして」とも思いません。なぜなら自分自身がいつか通った道であるため、現代の世界人類の心境が手に取るように理解でき、それらを温かく包み込んだ、歴史を通読する眼で現象界を見つめているからです。

感情想念に把われなくなるための課題実習の実例として、私の直近の経験をお伝えします。最近ではテレビをつけると、能登半島地震の被災状況や、パレスチナとイスラエル、ウクライナとロシアのいがみ合いの様相などが報じられています。羽田の事故も報道されていました。

最近では、そうしたニュースに触れるだけで目頭を熱くしていますが、数日前に「その境涯に止(とど)まっていはいけない。一瞬は触れたものに心を動かされても（悲しんでも喜んでも）かまわないから、すぐに太陽のように分け隔てのない光そのものの意識に立ち返ることが出来るよう練習すべし」という直観がありました。

共感疲労という言葉があるそうです。それは、「このように色々なことがあちこちで起こって世界が大変なのに、自分は普段どおりに生活していてもよいのだろうか？」と自責感を覚えたり無力感を感じたりする心理的状況なのだそうです。

「私の場合はどうだろう？」と考えましたが、ニュースに感情移入をして、その度に心が晴れたり曇ったりするようでは、本ものの神聖とはいえません。その意味で、私は共感しても把われない練習をしている段階なのだと思います。

「感情想念に把われないこと」を実践するためには、「掴まなければいい」「手放せばいい」という紋切り型の回答がありますが、掴んでしまい手放せないから困っているのです、それでは回答になりません。

ではどうすればいいのかということになります。方法はたくさんあります。それは人が画一的な存在ではなく、様々な通り道を生きてきたが故に、傾向も性質も十人十色だからです。ここでは代表的な例を、要点をかいつまんで紹介します。詳細については、勉強会にてお伝えします。

- (1) マイナスの想いが出るたびに、光明の思考に切り替える練習をする
- (2) 人間の本質を端的に表わした言葉を一日中唱え続ける
- (3) 一日中、守護霊への感謝に徹し、他の想念の入り込む隙間をなくす
- (4) 歩いているとき、お風呂やお手洗いの時間、起床・就寝の直後などの一人の時間に、光明の宣言をひたすら繰り返し、他の想念が浮かばないように練習をする（「私は神聖そのものだから不可能はない。必ず出来る」など）
- (5) 一日中、見たもの、触れたもの、聞いたこと、味わい嗅いだものに対して感謝し続ける
- (6) 手放したい事柄を思い浮かべて、ひたすら祈り言葉の中に投げ入れたり、神聖復活の印を組んだりする
- (7) 臍下丹田に意識の中心が収まっていることを意識しながら過ごし、瞑想を通してお腹の底から思い通りにならないすべての事象を抱(だ)きしめる練習をする
- (8) 一日中の呼吸を、ひたすらゆっくりとしたリズムで行なう練習をする

上記の項目を見ると、すべてに共通した要点が見えてきます。それは腹をくくって継続的に行なうということです。上記の項目に怯(ひる)む気持ちが出たとしたなら、それは腹が決まっていけないといえます。または、神聖の存在として生まれ変わって生きる覚悟を定めていないともいえます。

いつも申し上げております俯瞰の視座を常住視座にするためには、「人間だもの、仕方がないよ」というエゴさんが自分をかばう想いをも抱(だ)きしめて、守護霊の懷の中に意識を上昇させることです。土曜日の夜はそのように、守護霊の懷に抱(いだ)かれ、守護霊の視座を自身の視座とした意識で地球全体を抱(だ)きしめ、印を通していのちの根源からの光を放ってまいります。

2024年1月13日(土)夜 『神聖で繋がり合う日』 始めのお話

皆様、こんばんは。夜のズーム祈りの会を始めます。これから本格的な大変革の時期に入るにあたり、私達に共通の課題は、共感疲労という心のバランスを欠いた精神状態を卒業して、神聖の視座を常住視座にすることです。

もしも同時多発的に世界のあちこちで大変なことが起こったとき、またそうした事態が頻発したときに、私達がその度に二元対立の消えてゆく状況面のみに把われ、胸を痛めていたなら、心の海で溺れている同胞を抱(いだ)き助けることができません。

また自身がそうした事態に直面したときに、多くの人類と一緒に右往左往したり、心が折れたりしかねません。私達はそのような意味で今、次のような心境を体得するための波動調整を受けているのではないのでしょうか。

- ・何があっても把われない
- ・何があっても諦めない
- ・何があっても希望を抱(いだ)き続けられる
- ・何があっても前向きでいられる
- ・何があっても心に余裕を持ちつづけられる
- ・何があっても本ものと贋ものを見分けられる
- ・何があっても神聖意識でいられる

また、「寄り添いと同情」は、同じ意味のようにも思えますが似て非なるものです。人間の激しい感情想念の動きを台風に例えますと、「寄り添い」は自分自身が台風の目の部分、中心にいて、激しい風雨に翻弄されることなく、同胞を抱(だ)きしめることができる心境です。

それに対して単なる「同情」や「憐れみ」は、自分自身も二元対立の境涯にいて、他人の動向や世界の状況に一喜一憂する境涯です。それを台風の例でいえば、自身がみんなと同じように激しい風雨にさらされており、事態の推移を俯瞰することができずに、流されるままに流されている心境です。

私達が生きてゆくうえで一番大事なことは、常に神聖の視座を自らの当り前の意識にして生きることです。その中心軸さえ見失わなければ、現在北陸で被災されている同志の皆様のように、神聖を顕した人類の見本となる生き方を掴むことができます。

寄り添って生きることの大切さは、皆様も耳にタコができるほど聞いてこられたと思いますが、私はそれを、相手の状況や心情に寄り添うのみならず、自我を空しくして相手の心の中心軸、即ち神聖と一つになって、想念・言動・行為をすることだと考えております。

感情想念のうごめきは、宇宙全体の動きから観れば泡のように儚いものです。それは、すぐに終わってしまう線香花火のようなものだともいえます。私達はそうした人間の本質ではない部分に焦点を合わせるのではなく、人々の守護霊様と一つになり、自分の肉体をハシゴのように投げ出して、自身の背中のうえを歩いて神聖の世界へ戻っていただく。その前提条件は、自身の守護霊と一つ心になることです。

本日はそのように、自意識を浄化する働きを成すと同時に、自らを浄めてあまりある宇宙根源の光を私達の肉体を通して、空気、水、大地などの大自然、生きとし生けるもの、地球の同胞である世界人類へ向けて放ち、浸透させてゆく時間としてまいりますので、よろしくお願い申し上げます。

では時間になりましたので、世界平和の祈りを日本語と英語で行ないます。「はい」と申し上げましたらご一緒に「世界人類が...」とお唱えください。そのまま神聖に焦点を合わせて一分間お祈りし、「はい、ありがとうございました」と声が聞こえましたら目を開けてください。それでは始めます。